

優秀賞

— 高校生の部 —

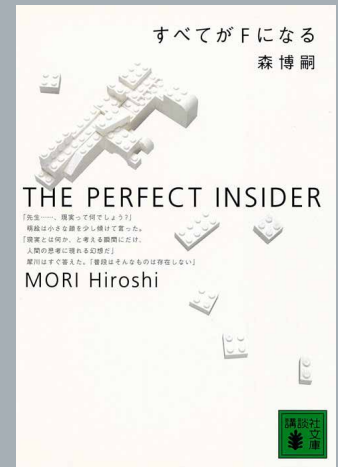
「天才がくれた言葉」

池濱碧衣さん

推し本:『すべてがFになる』

著:森博嗣

推したい相手:生き方に悩む高校生



「天才がくれた言葉」 池濱碧衣

人は生きていて、自分に影響する意見とそうでない意見と出会っていく。誰かにとっては何でもない言葉でも、他の人にとっては人生の方向すら変えてしまう言葉になる。またそれは完全に納得する意見だけではなく、その思考自体が影響を与えることがある。人の数だけ思想はあるのだから、何か一つの言葉で万人に影響を与えるということは難しい。だからこそ私は、自分という色眼鏡を通して観た世界で出会い、それでも尚自分に響いた言葉を大切にしたい。私に響く言葉を届けてくれたのは森博嗣さんの「すべてがFになる」である。あなたは天才に出会ったことがあるだろうか。計算が早い、漢字が得意、外国語が喋れる。天才というのは非常に定義が曖昧なものであるが、頭が良いとは違うのかもしれない。この物語には「最も神に近い存在」とされる天才プログラマー真賀田四季女史が登場しその世界を創る。幼い頃にプリンストン大学にて修士号を、マサチューセッツ工科大学にて博士号を取得し多様な分野についての知見を持つ。そんな彼女が関係するある密室殺人を中心に物語は展開していく。大学の准教授犀川創平と、女子学生西之園萌絵が密室殺人の謎を紐解くことで事件の解決に近づいて行くとともに真賀田女史の姿が少しずつ露わになり始める。天才プログラマーは何を考え生きているのか。真賀田女史は多重人格者として描かれている。そして物語の途中で人は誰しも複数の人格を持っている、と言う場面がある。果たして本当にそうなのか。私は最初、その意見には賛同できなかった。しかし自分を振り返ってみると、もしかしたら私の中にも様々な人格があるのではないか、と思うようになってきた。競技性のあるスポーツをやっている時は誰にだって負けないと思う強気で自信家な自分がいる。難題に直面するとすぐにわからないと挫けてしまう自分もいる。身の回りのものはきちんと整頓したがる丁寧で几帳面な自分がいながら、不器用で荒っぽい創作をする。これを、人格の交代と表現するのは至って自然なことではないか。複数の人格が私という人格を生成して交代しながら表面に出て生活しているのではないか。そう言う視点が生まれてきた。さらに真賀田女史は、判断が遅い人は各人格が拮

抗的に働くから主人格が決断することができなくなるからだと言ひ、また判断が早い人は主人格が他人格と支配的な関係を持つためだと言った。確かに、医療的に見れば多重人格とは定義が異なってしまうだろう。しかし、一つの視点として新しい考え方を真賀田女史は与えてくれた。私は、自分自身の存在が嫌いだ。何をするにもうまくできない、無力すぎる自分が嫌いだ。しかし、この小説を読んだ後では私のすべてが駄目なのではなく、私の中の一部の人格が嫌いなのだと思います少しだけ自分を肯定できるような考え方に変わっていった。私はずっと、自分自身を一括りにし全てをただ否定していた。自分を嫌いだと思う一方的な思考を持つ人格だけが私を支配していたのだと気がついたのは、自分にとって大切なことであつたと今では思う。また、真賀田女史に限らず准教授の犀川創平氏もさまざまな言葉を私たち読者に投げかける。「自然を見て美しいなと思うこと自体が不自然なんだよね 汚れた生活をしている証拠だ」と彼は言う。自然を觀にいつては綺麗だと形容する私たちは、普段の生活に慣れているが故今身の回りにあることがスタンダードだと思い込んでいることを気がつかせる一節だつた。情報が溢れる社会だからこそ、物事の本質が失われつつあるのではないかと、私はこの部分を読んで危機感を感じた。もしかしたら、そうやって自分自身も見失っていくのかもしれないとも思った。しかし、何かと比較してしか私たちはそんなことに気がつく事ができない。私たちは、もっと広い視野で批判的に物事を見なければいけないのではないか。真賀田女史の卓越した思考は私に大きな影響を与えた。この世のタブーを引き裂いていくような独特の思考に、私は救われた。もちろん、全てに賛同しているわけではないが、そのような意見でも心に響くものがある。人は自分が正しいと信じる思想以外を排除し自分の持つ理屈で完結しようとする。だからこそ傷つき、悩み、暗闇を彷徨う。この作品の中に入ると、そんな闇の中の光を少しだけ浴びられるような気がする。何もかも善悪で決めつけてしまう世界に生きる私たちに、他人の理解に関わらずそこにある真実と本当の世界の姿を見る入り口に立たせてくれるこの小説を、私はあなたに推したい。